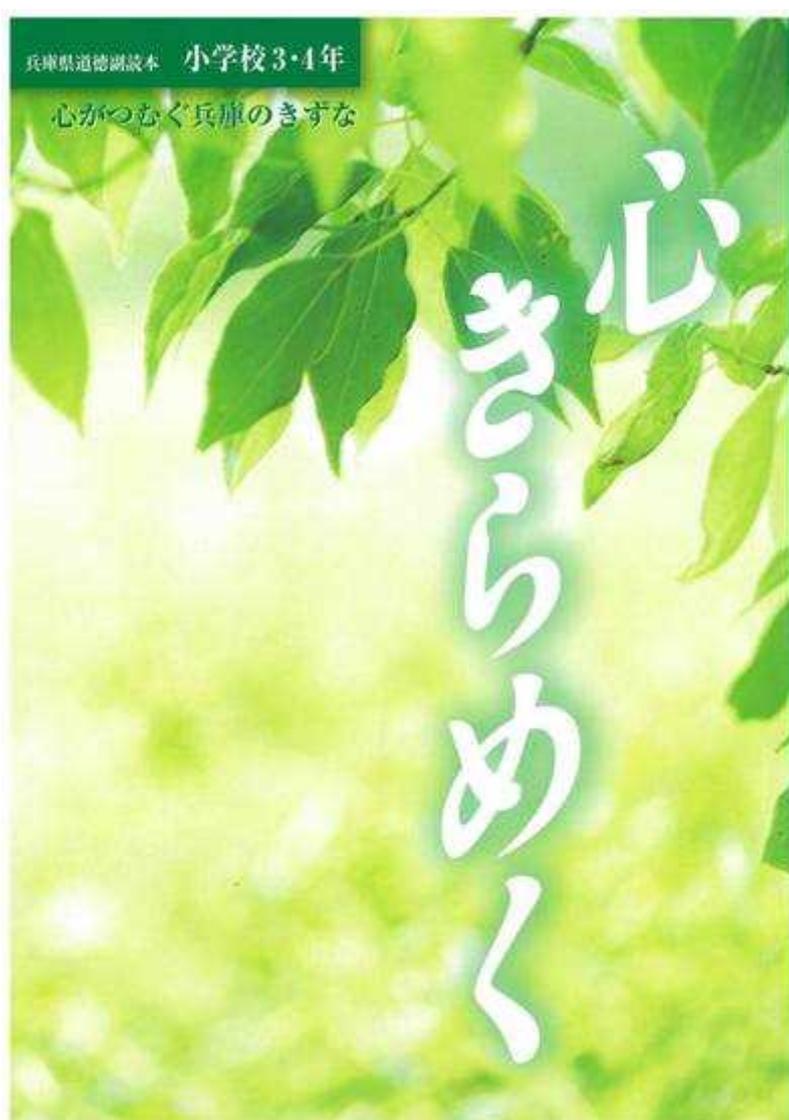


兵庫版道徳教育副読本 教師用指導書

心 きらめく（小学校3・4年）



兵庫県教育委員会

【p 4～p 9】 オオムラサキのたん生

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておき、授業では、4ページから6ページの1行目までは教師が要点を説明し、6ページの2行目から教師が範読する方法もある。
- 主人公がさなぎを触った時にブルッ、ブル、ブルッと震えることに驚き、鮮烈に生命を感じる場面では、子どもが頭で考えるだけでなく、自分自身が生き物を触った時に「生きていること」を実感した体験とのかかわりを大切にする。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：たいき君（子どもが「たいき君」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：指でふれて「ブルッ、ブルッ、ブルッ」とさなぎが激しくふるえたこと
- 変化するところは：「たいき君は、さなぎを見ながら小さな声で言いました。『放っておいてごめんね。』」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『月刊 たくさんのふしぎ』通巻302号「オオムラサキ舞う森 昆虫少年の夢」草山万兎・文 足立隆昭・写真、福音館書店、2010年

【参考URL】

- ・ 兵庫県立丹波の森公苑
<http://www.tanba-mori.or.jp>
- **オオムラサキについて**
 - ・ オオムラサキは、チョウ目・タテハチョウ科に分類されるチョウの一種である。成虫のオスの翅（はね）の表面は、光沢のある青紫色で美しい。メスはオスより一回り大きい。翅はこげ茶色をしている。オオムラサキの幼虫は、冬の間は地面に降りてエノキの根際や落ち葉の中で越冬する。幼虫は春になるとエノキやエゾエノキの葉を食べて成長し蛹になる。そして、6月から7月にかけて成虫となる。
 - ・ 1957年に「国蝶」に選ばれているが、現在は環境省により準絶滅危惧（NT）に指定されている。
- **本資料の素材について**
 - ・ 本資料の話は丹波市にあるA校の取組がもとになっている。A校の近くの川にかかる橋の欄干にオオムラサキが描かれている。同校区では、以前はオオムラサキがたくさん飛んでいたという話を聞いたA校の3年生が、「もう一度オオムラサキを飛ばしたい～オオムラサキ復活プロジェクト～」という計画を立てて取り組んでいった。まず、オオムラサキの幼虫さがしから始めたが、見つからなかった。そこで、県立丹波の森公苑（丹波市柏原町）からオオムラサキの幼虫を8匹分けてもらい、飼育・観察を続けた。そして、ついにオオムラサキが誕生（羽化）したのである。この取組は、丹波の森公苑の足立隆昭先生（森づくりアドバイザー）の指導のもとに進められた。
 - ・ A校以外にも丹波市内や丹波篠山市内には、オオムラサキの幼虫を校内に生えているエノキに放し、飼育に取り組んでいる小学校がある。
 - ・ 県立丹波の森公苑では、初代河合雅雄公苑長（現・名誉公苑長、京都大学名誉教授）の夢である「オオムラサキが舞う丹波の里山」の実現に向け、公苑内に約370本ものエノキを植え、平成19年から飼育専用ケージの中でオオムラサキの飼育に取り組んでいる。また、夏には公苑内のクヌギ林へオオムラサキの成虫を放蝶し、自然界での成長を見守る取組も行っている。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ 命のすばらしさ D (18)
- ・ **資料の概要** ・ 「オオムラサキをとばそう」という計画を立てたたいきたちは、譲り受けた幼虫に関心を寄せながら観察を続けていった。動かなくなったさなぎを観察しに行かなくなった時、先生からさなぎを触ることをすすめられ、激しく振動するさなぎに生命の存在を実感したたいきは、羽化したオオムラサキをあたたく見つめる。
- ・ **ね ら い** ・ さなぎにふれた時、「ブルッ、ブルッ、ブルッ」と激しく震えることを体験して道徳的に変化したたいきを通して、生命の尊さを感じ取り生命あるものを大切にす道徳的心情を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・ 今日資料に興味を持つ。	副読本P9の写真(オオムラサキ)の写真をみましょう。
展 開	・ 資料の範読を聞きながら黙読をする。	
	・ こうた君と顔を見合わせてにっこりした時の主人公の気持ちを考える。	観察日記を書きながら、こうた君と顔を見合わせてにっこりしたたいき君は、どんなことを思っていたのでしょうか。 ・ 大きくなるのが楽しみだね。 ・ きれいなオオムラサキになって飛ぶ姿を早く見たいね。
	・ 先生から観察日記を書いていないことを注意された時の主人公の気持ちを考える。	「かれてるみたいで、見に行ってもな……。」と言った時、たいき君は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・ 動いて葉っぱを食べないと、見ててもおもしろくないな。 ・ もうかれて死んでしまったのかもしれないな。 ・ 毎日同じ様子を日記に書いてもしかたないよ。
	・ 指で触れたさなぎがはげしく動いた時の主人公の気持ちを考える。	「放っておいてごめんね。」と小さな声で言った時、たいき君はどんなことを思ったのでしょうか。 ・ ちゃんと生きているんだね。すごいな。 ・ 動かないからといって、見に行かなくてごめんね。 ・ 動かなくても、さなぎの中で大きくなっていたんだね。 ・ 勝手にかれているみたいだと思ってしまっごめんね。
	・ さなぎを触った時の感触を思い出している主人公の気持ちを考える。	飛び立つオオムラサキを見ながら、たいき君はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・ あの時のさなぎの中の命が飛び立ったんだね。 ・ ちゃんと強く生きるんだよ。 ・ これからもオオムラサキの命を大切に守るよ。
終 末	・ 感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

よう虫の成長を楽しみにしている主人公の心に共感させる。

主人公が観察日記を書かなくなったのは、さなぎに命の存在を感じていないからであったということをおさえる。

さなぎがはげしくふるえたことがきっかけとなり、さなぎの命を強く意識し、驚いている主人公の心に共感させる。

ブルッ、ブル、ブルッという感触を思い出し、生命の存在を実感している主人公の心情の高まりをおさえる。

【p 12～p 17】 近松の里をめざして

1 資料活用にあたって

- 社会科の身近な地域や市町の古くから残る建造物、地域の人々が受けついできた文化財や年中行事の学習などに関連させると効果的である。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：ぼく（陽一）（子どもが「ぼく」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：ボランティアガイドのおじいさんの話
- 変化するところは：「ぼくはなんだかはずかしくなりました。」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ NHKにんげん日本史「近松門左衛門」監修 酒寄雅志 著者 小西誠一、理論社、2004年

【参考URL】

- ・ 尼崎市（近松の里）
http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/manabu/chikamatu/055chikamatsu_sato.html
- 近松門左衛門について
 - ・ 「日本のシェークスピア」と評される近松門左衛門は、江戸時代に越前福井の武士の家に生まれたとされる。京都に移って公家に仕えながら人形浄瑠璃に興味を持ち、その後武士を捨てて芝居の脚本家として400以上の作品を書いたとされる。晩年は大阪に移り住み、尼崎をたびたび訪れては、執筆活動をしていたとされる。近松の生涯は謎の部分が多いが、亡くなる前に辞世の言葉をきかれたところ「私の作品が時世である。それが後のちの世まで伝わっていくならば。」と言ったとされている。
- 尼崎と近松門左衛門
 - ・ 近松は尼崎を気に入り、廣濟寺に作品を書くための部屋(近松部屋)を作った。多くの有名な作品がここで書かれたとされている。廣濟寺は近松の菩提寺とされ、近松の墓は国指定史跡となっている。
 - ・ 尼崎では、伝統文化の振興および近松の功績を後世に伝えるために、尼崎を近松の里として「近松記念館」や歌碑、モニュメントなどを市内に建て、近松文化のメッカとなることを目指している。
 - ・ 昭和11年から近松祭りが10月下旬に開かれ、人形浄瑠璃の講演などゆかりの芸能が上演されている。
 - ・ 市内の下坂部小学校には、浄瑠璃クラブがあり3年生以上の子どもたちが活動をしている。また、人形浄瑠璃の観賞会なども開かれている。同校は、近松祭りにも参加し発表会を開いたり、総合的な学習の時間で近松や人形浄瑠璃についての学習をしたりしている。
 - ・ 市が取り組む活動だけではなく、地域にもボランティアで近松の里を案内する「近松かたりべの会」がある。また、小学校での講演の実施や人形浄瑠璃体験、トライやる・ウィークでの中学生を受け入れなどの活動している「近松応援団」もある。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ふるさとの自慢 C (16)
- ・ **資料の概要** ・ぼくは尼崎の自慢を調べるとい宿題に、「別に自慢できるところなんてない」と思いながら、近松の里を訪れる。そこでボランティアガイドから、近松の里が尼崎の自慢として大切にされていることを教えられる。帰宅後、父に「大事なことを勉強した。」と言われたぼくは、尼崎のよさをみんなに伝えるために発表の下書きを始める。
- ・ **ね ら い** ・ボランティアガイドのおじいさんの話を聞いて道徳的に変化するぼくを通して、地域の行事や活動に興味を持ち積極的にかかわろうとする道徳的実践意欲を養う。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ	自分たちの町の自慢は何ですか。
展 開	・資料の判読を聞きながら黙読をする。 ・自慢できるところはないと言った主人公の気持ちを考える。	「別に自慢できるところなんてないのに…」と言った時、ぼくはどんな気持だったのでしょうか。 ・そんなこと今まで考えたこともないよ。 ・尼崎に自慢できる有名なものなんかないよ。
	・ボランティアのおじいさんの話を聞いた時の主人公の気持ちを考える。 ・発表の下書きを始めた時の主人公の気持ちを考える。	ボランティアガイドのおじいさんから「近松門左衛門」や「近松の里」の話を聞いたぼくは、どうしてはずかしくなったのでしょうか。 ・「日本では知らない人はいない」と言われたから。 ・自分の町のことを知らないことがわかったから。 ・尼崎に自慢できるところなんてないと思っていたから。 発表の下書きを始めたぼくは、どんなことを考え始めていたのでしょうか。 ・町みんなが尼崎のよさを大切にしているんだね。 ・自分も尼崎のよさを大切にしていきたい。 ・クラスみんなにも尼崎の自慢を教えてあげよう。
終 末	・感じたことを発表する。	感じたことを発表しましょう。

「自慢できるところなんてない」という言葉に着目させ、郷土の伝統や文化に対する主人公の意識が低いことをおさえる。

ボランティアガイドのおじいさんの話がきっかけとなり、郷土を誇りに思う意識が主人公に起こっていることをおさえる。

おじいさんから聞いた話を思い出し、郷土の文化を大切に、郷土を誇りに思う気持ちになっている主人公の心情の高まりをおさえる。

【p 22～ p 27】 但馬に牛を —前田周助—

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 22ページ～23ページ1行目までは、周助の牛への思いの強さについて教師が要点を説明し、23ページ12行目から発問構成する進め方もある。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：周助（子どもが「周助」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：「但馬に入る峠で足を止め、故郷の方角を見渡すと、高くて急な斜面の山がたくさん並び、その谷ごとに小さな村がぽつんぽつんと点のようにみえており、その土地が、周助に助けを求めているかのよう」
- 変化するところは：「わたしが大阪に行くわけにはいかないのだ。」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『但馬人物ものがたり・上巻』、徳山喜重、但馬文化協会・(財)但馬ふるさとづくり協会、1998年
- ・ 『周助が犇（はし）る』、前田利家、文芸社、2008年

○ 前田周助の略歴

- ・ 1798年（0歳） 誕生（現・香美町小代区猪谷）。
- ・ 1805年（8歳） 「牛飼い童子」、「牛飼い坊主」と呼称される。
- ・ 1817年（20歳） 近隣の村の娘と結婚。
- ・ 1823年（26歳） 河内（大阪）の市場へ4頭出品し、好評を受ける。
- ・ 1826年（29歳） 前田家親族会議開催（周助の牛への投資が行き過ぎての会議）。
- ・ 1833年（36歳） 養父市場（現・養父市）へ出品し、好評を受ける。
- ・ 1845年（48歳） 非公式に牛市場を隣の村岡（現・香美町村岡区）で開催。
- ・ 1850年（53歳） 村岡より良牛を見つけ出し、周助蔓（つる）の基礎牛とする。
- ・ 1868年（71歳） 家畜商を後継者に託す。
- ・ 1872年（75歳） 没する。

※ 故前田周助顕彰碑が建立される。（香美町小代区）

○ 地理的背景・時代背景

- ・ 小代区並びに周辺集落は、中国山地の西方に位置し、氷ノ山を中心に高く切り立った山々に囲まれ、その間に深い谷が数本に分かれているうちの一つにあった。それぞれの谷は険しく、急な斜面に張り付くようにして村々が点在し、狭い農地で細々と農業等で生計を立てていた。もちろん、牛はその険しい農地を耕す際の大きな力として飼われていた。まだ食肉用としての牛というより、農耕における機械代わりといった要素が強かった。
- ・ また、当時は農業収入の他、雪深い地域のため、冬期間は出稼ぎ等も頻繁に行われて、家計を支えていた。生活面では、テレビも電話もなく、ランプやろうそくの火をたよりに細々と暮らし決して裕福ではなかった。どこに行くにも徒歩が中心であった。

○ 但馬牛の波及

- ・ 但馬牛からとれる牛肉は脂質・肉質が良いため、但馬牛は松阪牛（三重県）や近江牛（滋賀県）の素牛となっている。また、前沢牛（岩手県）、仙台牛（宮城県）、飛騨牛（岐阜県）、佐賀牛（佐賀県）などのように、但馬牛の血統を入れることで牛の品種改良が行われていることも多い。
- ※ 松阪牛（まつさかうし）など牛を示す場合は「うし」と呼び、神戸牛（こうべぎゅう）など牛肉を示す場合は「ぎゅう」と呼ぶことが多い。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ふるさとのために C (16)
- ・ **資料の概要** ・腕の良い牛飼いの周助は、家族に反発されながらも牛の改良に全力を注ぐ。ある日、子牛を大阪の牛市場へ出品し、最高値で売れたことで有頂天になり故郷を離れることが頭をよぎる。しかし、帰り道、峠から見た郷土の風景を眺めた周助は、故郷のために牛の生産に尽力することを決意する。その後も良牛を目指して日々奔走し、「周助つる」と呼ばれる良牛の祖を育てた。
- ・ **ね ら い** ・峠に立って故郷の急な斜面の山と谷あいの村をみて道徳的に変化する周助を通して、地域の人々や生活を大切に、郷土を愛する道徳的心情を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	「但馬牛」の名前を聞いたことがありますか。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・大阪の牛市場で自分の育てた子牛が高く評価された時の主人公の気持ちを考える。 ・「大阪に行くわけにはいかない」とつぶやく主人公の気持ちを考える。 ・良い牛を求めて村から村へと歩きまわる主人公の気持ちを考える。 	<p>「おい、次もまた来てくれよな。ぜっ対だぞ!」と言われた時、周助はどんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うれしい。自分のしてきたことに間違いはなかった。 ・今まで家族には迷惑をかけてきたけれど、大阪に出れば楽な暮らしができるぞ。 <p>「大阪に行くわけにはいかないのだ。」とつぶやいた周助は、どんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふるさとを盛り上げるには牛の飼育しかない。 ・自分の家族の暮らしが楽になることだけを考えてはいけないんだ。 ・これからも良牛を育てて、日本一の故郷にしていこう。 <p>良い牛を求めて村から村へと歩きまわる周助は、どんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・良い牛を育て後々まで伝えることで、ふるさとを豊かにしたい。 ・みんなにも、良い牛を育てることが村を豊かにすることをわかってもらおう。
終 末	・感じたことを発表する。	感じたことを発表しましょう。

22 ページ～23 ページ
11 行目までは、周助の牛への思いの強さについて教師が要点を説明する。

苦勞が実り、自分の育てた子牛が高く評価される声を聞いた時の主人公の心を考えさせる。

峠から見た故郷の風景がきっかけとなり、故郷を愛する意識が主人公に起こっていることをおさえる。

小代村の将来のために良い牛を増やそうと行動している主人公の郷土を愛する心情の高まりをおさえる。

【p 30～ p 35】 神戸の水

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 30ページ～33ページ8行目までは、主人公が「神戸の水」が世界一であることを知る様子について教師が要点を説明し、30ページ9行目から発問構成する進め方もある。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：わたし（子どもが「わたし」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化のきっかけ（助言）は：「水がごっついきれいやんか」
- 変化するところは：「そうや、そうやった。」

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 神戸市立水の科学博物館（神戸市ホームページ内）
<http://www.city.kobe.lg.jp/life/town/waterworks/water/hakubutukan/>

【訪れたい場所】

- ・ 神戸市立水の科学博物館
〒652-0004 神戸市兵庫区楠谷町 37-1 Tel：078-351-4488
- 神戸の水について
 - ・ 神戸の水がおいしく、くさりにくいとされているのは、六甲山系に降り注いだ雨が豊かな森林から豊富なミネラルを含みながら、花崗岩が風化した地層を通して地下にしみ込んでわき水になるからであると言われている。
 - ・ 神戸の水が世界的に有名になったのは、神戸港から船に積み込んで赤道をこえるぐらい遠くに行ってもおいしく飲めたからである。また、神戸の水は食品の国際コンテストで金賞をとったことでも有名である。
 - ・ 明治時代、神戸に入港した船が積み込んでいた神戸の水は、布引の滝上流の布引ダムにたくわえられていた水を使っていたと言われている。現在は、当時のように布引ダムの水が船に積み込まれることはない。
 - ・ 食品の国際コンテストで金賞をとった「神戸ウォーター」は、新幹線のトンネル工事の際にわき出してきた水が使われていた。現在、「神戸ウォーター」という名で販売はされていないが、ペットボトルウォーター「神戸の水だより～布引～」として神戸市役所売店や神戸市立水の科学博物館、神戸空港内などで発売されている。
 - ・ わき水は、現在も神戸市の水道の水源の一部として使われている。とは言うものの、神戸市が自己水源で供給可能な量は神戸市で使用する量の4分の1程度である。残りの4分の3は、琵琶湖から流れて来ている淀川の水を阪神水道企業団から買っている。
- 布引の滝について
 - ・ 布引の滝は、新幹線の新神戸駅から山側に徒歩20分程度の距離である。町の近くで美しい水に出会える場所である。布引は昔から和歌や物語によく登場したため、布引の滝周辺では歌碑を多く見ることができる。

（神戸市水道局発行パンフレット『神戸の水だより』から）

4 展開の具体例

神戸の水

- ・ **主 題 名** ・ 自然を大切に D (19)
- ・ **資料の概要** ・ 全校写生会の日、行く道で先生から神戸の水が世界でも評価されていることを聞いたわたしは驚く。布引の滝の絵を描き終えたわたしは、筆を洗って汚れた水を持ち帰ることをためらう。その時、友だちから声をかけられ、わたしは、はっとする。そして、荷物は重い、足取りが軽く感じられるようになる。
- ・ **ね ら い** ・ 「水がごっついきれいやんか」と言われ、はっとして道徳的に変化するわたしを通して、自然のすばらしさに感動し、自然や動植物を大切にしようとする道徳的判断力を育てる。

・ 展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導 入	・ 今日資料に興味を持つ。	副読本P32の写真(布引の滝)を見ましょう。	33ページ8行目までは、主人公が神戸の水が世界一であることを知る様子について教師が要点を説明する。
展 開	・ 資料の範読を聞きながら黙読をする。		
	・ 布引の滝を見た時の「わたし」の気持ちを考える。	布引の滝を見た時、「わたし」はどんな気持ちだったのでしょうか。 ・ 世界一と言われるのがよくわかるぐらい水がきれい。 ・ 町の近くにこんな美しい水があるなんてすごいな。	美しさに感動している主人公の心に共感させる。
	・ ペットボトルにごった水を見て手が止まった主人公の気持ちを考える。	ペットボトルをリュックサックに入れようとして、手が止まった「わたし」は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・ にごってきかないし、持つのは重いな。 ・ こっそりどこかに流してしまおうかな。 ・ これくらいの少しの水なら流しても大丈夫だろう。	汚れた水を持ち帰ることをためらう主人公は、自然愛護に関する道徳上の問題を気にしていることをおさえる。
・ としゆきから声をかけられ、はっとした時の主人公の気持ちを考える。	としゆきさんに「水がごっついきれいやんか」と言われてはっとした「わたし」は、どう思ったのでしょうか。 ・ 神戸のきれいな水を汚してしまうところだった。 ・ せっかく絵できれいに水を描けたのに、本物の自然を汚してはだめだわ。 ・ にごった水を流してしまおうとした時は、私の心もにごっていたのかもしれない。	としゆきさんの「水がきれいやんか」という言葉がきっかけとなり、主人公の自然愛護の判断に関する考え方が変わったことをおさえる。	
	・ 帰り道足取りが軽く感じる主人公の気持ちを考える。	帰り道、足取りが何だか軽くなってくるように感じる「わたし」は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・ 大切な自然を汚さなくてよかった。 ・ 美しい自然を大切にするのは私たち一人一人だわ。 ・ 神戸の水の美しさをずっと守っていききたいな。	帰り道に足取りが軽く感じる主人公の心を考えさせ、主人公が自分の判断が正しかったと確信していることをつかませる。
終 末	・ 感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。	

【p 38～p 41】 オサムシくん ―手塚治虫―

1 資料活用にあたって

- 本資料は、手塚治虫の人生のうち、子どもの頃の虫が大好きというところが描かれているので、事前に手塚の作品を読ませておくイメージがわかりやすい。
- 授業の展開として、38・39ページで発問構成し、40ページでは大人になってからの手塚の心情にふれたり、子どもが読んだ手塚作品の意見を出し合ったりするなどの展開が考えられる。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（手塚さん）を通して身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接することについて考える資料であり、手塚さんの立場で場面を捉えていく。（子どもが「手塚さん」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 39ページの「手塚さんが中学生のころにかいた絵」を描いた手塚さんになりきり、絵の中の虫に語りかけることで、動植物を愛おしむ手塚さんの心情を考えさせる。

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 宝塚市立手塚治虫記念館HP
<http://www.city.takarazuka.hyogo.jp/tezuka/>

【訪れたい場所】

- ・ 宝塚市立手塚治虫記念館
〒665-0844 兵庫県宝塚市武庫川町7-65 TEL：0797-81-2970

○ 手塚治虫について

- ・ 手塚治虫は、1928年11月3日、大阪府豊中市に3人兄弟の長男として生まれた。
- ・ 開放的な家庭に育ち、漫画とアニメーションに親しみ、機智に富んだ想像力豊かな少年であった。
- ・ また昆虫をこよなく愛し、フェアブルを思わせる少年でもあった。自身のペンネームに「虫」という字を当てたことでも、その興味の程がわかる。
- ・ 戦争体験から生命の尊さを深く知り、医学の道を志して後年医学博士になるが、結局彼自身が一番望んだ職業を選んだ。すなわち漫画家、アニメーション作家である。手塚治虫が創作した漫画とアニメーションが、第2次世界大戦後の日本の青少年の精神形成の過程で果たした役割は計り知れない。
- ・ 手塚は、それまでの我が国の漫画の概念を変え、数々の新しい表現方法でストーリー漫画を確立し、漫画を魅力的な芸術にした。また、彼の作品は、文学や映画をはじめ、あらゆるジャンルに影響を与えた。
- ・ 同時にアニメーションにおいても、漫画におけるそれに勝るとも劣らない大きな足跡を残した。我が国初の連続TVアニメーション「鉄腕アトム」や、連続TVカラーアニメーション「ジャングル大帝」、2時間TVアニメの「バンダーブック」など、これらの作品の愛すべきキャラクター達は、TVを通じて日本中を席卷し、アニメーションを大衆に深く浸透させることになった。

○ 手塚治虫と昆虫

- ・ 1939年（11歳）友人から借りた、平山修次郎著『原色千種昆蟲図譜』を見て、「オサムシ」という虫を知り、本名の治に虫をつけて「治虫」というペンネームをつける。昆虫採集を始める。
- ・ 1941年（13歳）昆虫採集に熱中し、「昆虫戦線記」「昆虫の身の上ばなし」などの昆虫を題材にしたマンガもかく。
- ・ 1943年（15歳）「原色甲蟲圖譜」第一集、第二集を発行。
- ・ 1944年（16歳）エッセイ集「昆蟲つれづれ草」、「研究記録雑話 春の蝶類」を発行。「原色増訂ヒドロ蟲類圖譜」発行。「原色櫛水母圖譜」発行。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ 自然のすばらしさや不思議さ D (19)
- ・ **資料の概要** ・ 手塚さんは、小学生の頃に約三千もの標本をつくるなど、子どもの頃から虫が大好きであった。小学校3年生の頃オサムシに出会った手塚さんは、自分に似ているその虫に親近感を覚えて「治虫」というペンネームに決めた。手塚さんの虫好きは中学生になっても続き、自然の不思議さ、すばらしさを感じながら精緻な虫の絵を描くのであった。
- ・ **ね ら い** ・ 虫が大好きで、精緻な虫の絵を描く手塚さんを通して、自然や動植物を大切にする道徳的心情を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P41の写真(鉄腕アトム)の写真をみましょう。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・こん虫図鑑を繰り返して見ている主人公の気持ちを考える。	こん虫図鑑を何度も何度も見ている手塚さんは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・きれいな虫や不思議な虫がいっぱいいるな。 ・何時間見ても飽きないな。 ・今度は、この虫を探しにいこう。
	・オサムシに出会った時の主人公の気持ちを考える。	「オサムシ」に出会った手塚さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・顔も似ているし、やることもぼくとそっくりだ。 ・ぼくに似ている虫がいるなんて、不思議だな。 ・ペンネームは「治虫」にしよう。
	・精緻な虫の絵を描いている時の主人公の気持ちを考える。	P39の虫の絵をかきながら、手塚さんはどんなことに気付いていったのでしょうか。 ・一匹一匹特徴がちがっておもしろいな。 ・どの虫もほんとうにきれいな色だな。 ・こんなにいろいろな虫がいるなんて不思議だな。
	・資料の範読を聞きながら黙読をする。	
終 末	・感じたことを発表する。	感じたことを発表しましょう。

大好きな虫が載っている「こん虫図鑑」を買ってもらい、わくわくしながら見ている主人公の心に共感させる。

オサムシに出会い、自然の不思議さ、すばらしさを感じている主人公の心を考えさせる。

虫の絵を精緻に描きながら、自然に親しみ動植物を大切にしようという気持ちになっている主人公の心情の高まりをおさえる。

P40をもう一度範読し、大人になってからも手塚さんの自然愛の心情が貫かれていたことをおさえる。

【p46～p51】 愛のひと —野口ゆか—

1 資料活用にあたって

- 本資料では、野口ゆかが保育園を創設した業績だけではなく、その根底となる ゆか が幼少期から持ち続けた思いやりの心に目を向けさせる。
- 中学年の内容項目B(6)では、相手の状況、困っていること、大変な思いをしていることなどを想像することによって相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるよう指導することが求められている。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公(野口ゆか)の生き方を貫くものを考える資料であり、ゆかの立場で場面を捉えていく。(子どもが「ゆか」になって考えられるように発問を工夫する。)
- ゆかの生き方を貫いたものは、相手の立場に立って親切にしたいという思いやりの心であり、子どもの頃から困っている人を見るとじっとしておれないなど、ゆかが幼少期から持ち続けた心情であった。
- ゆかに愛情を注ぎ思いやりの心を育んだ父の「子どもはたからだ」という言葉は、人生の二度の転機でゆかの頭に去来し、進むべき道を決意させる。一度目は十九歳の時に両親を亡くして、悲しみ、さみしさ、絶望の中にあつた時に、子どもの力になろうと自分のすべきことを見つけるきっかけとなり、二度目は、豊かな家庭の子どものための保育園しかないことに心を痛めていた時に、恵まれない家庭の子どもが通える保育園をつくり、自分の生涯を捧げる決心をするきっかけとなった。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『黎明の女たち』島京子編 神戸新聞出版センター、1986年
 - ・ 『学問・教育の道ひらく』近代の女性史9、集英社、監修 円地文子、1981年
 - ・ 『郷土百人の先覚者』兵庫県教育委員会、1967年
- 野口ゆかについて
- ・ ゆかは、慶応2年(1866年)、姫路で六人兄弟の長女として生まれ、高潔で学問好きなところを父から、心やさしく明るいところを母から受けつぎ、すくすくと育っていった。
 - ・ 小さい時から、向学心があつたゆかは、父親が写本してくれた漢学や英語の本で勉強していた。また、困っている人をみると、そのままにしておくことができない子どもだった。
 - ・ 東京女子師範学校時代に心の支えであつた父母が続けて死去し、人生で最大の孤独と絶望感を味わつた。その時に、子どもの力になろうという自分の夢を見つけ、絶望から抜け出す。
 - ・ ゆかは、恵まれない家庭の子どもが満足な保育をうけられないで放任されていることを見過ごすことができず、友達であつた森島美根(もりしまみね)、徳永恕(とくながゆき)と協力して日本最初の幼稚園(二葉幼稚園)を設立した。ゆかは、幼児教育に一生をささげ、東洋のフレーベル※になろうとしたのである。
 - ・ ゆかは、八十五歳の長寿を全うし、多磨墓地に埋葬され「二葉保育園の母 野口ゆか……ここにねむる」と刻まれた自然石の墓がある。姫路にも分骨されている。
- ※フレーベル：1782年～1852年、ドイツの教育者。幼児教育の祖であり、「幼稚園(Kindergarten)」という言葉を初めて用いた。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・進んで親切にしよう B (6)
- ・ **資料の概要** ・ゆかは、小さい頃から困っている人を見るとほっておくことができない子であった。困っている人がいれば、自分ができることを考えて行動していた。両親の死後、父の言葉を思い出し、子どもたちの力になろうと決意したゆかは、教育を受けることができなくて困っている子どもたちのための保育園を作り、幼児教育に一生をささげる。
- ・ **ね ら い** ・恵まれない子どもたちの保育園を創設する主人公を通して、困っている人には進んで親切にしようとする道徳的実践意欲を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・学習する道徳的価値に関心を持つ。	友達に親切にしてもらって、うれしく思ったことはありますか。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の範読を聞きながら黙読する。 ・困っている人を見たときの主人公の気持ちを考える。 ・めぐまれない子どもたちを目にして、お父さんの言葉がよみがえった時の主人公の気持ちを考える。 ・笑顔で子どもたちの輪の中に入る主人公の思いを考える。 	<p>子どもの頃、近くに住むおばあさんや隣の家のお手伝いさんが困っているのを見た時、ゆかはどんな気持ちだったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きつとつらい思いをしているのでしょうかね。 ・何かわたしにできることはないかな。 ・困っている人たちを放っておけない。 <p>「子どもは宝だ。」と言ったお父さんの言葉がよみがえった時、ゆかはどんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この子たちのために、私にできることは、どんなことだろう。 ・わたしも、お父さんがわたしのためにしてくれたように子どもたちのためになるう。 ・困っている子どもたちのための保育園をつくろう。 <p>笑顔で子どもたちの輪の中に入っていきゆかは、どんな気持ちなのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの笑顔がうれしい。 ・子どもたちの笑顔は、わたしの宝物だ。 ・この子どもたちがいつも笑顔でいられるように、これからもがんばろう。
終 末	・自分のことを振り返る。	副読本P51を読みましょう。

相手の困っていることを想像することによって相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする主人公の姿をおさえる。

再び思い出したお父さんの言葉がきっかけとなり、主人公に、相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする意識が高まっていることをおさえる。

笑顔で子どもたちの輪の中に入る主人公が、「これからも困っている子どもたちのために力を尽くそう」という実践意欲を強めていることをおさえる。

【p52～p57】 そろばんづくり ―小野のそろばん―

1 資料活用にあたって

- 宮本一廣さんの「働くことの喜びや楽しみ」に焦点をあてれば、内容項目はC（13）となり、宮本さんの「伝統工芸を伝えていこう」という気持ちに焦点をあてれば、内容項目はC（16）となる。

2 資料の読み方のポイント

- ※ 展開の具体例は内容項目C（13）で想定したものを示している。
- 変化するのは：かず（子どもが「かず」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：宮本さんの話「一人でも多くの人に使いやすいと思ってもらえるように、気持ちを込めて作っている」と、お母さんの話「宮本さんの心がぎゅっと詰まっているように」
- 変化するところは：「最初は右手で持ち上げ、すぐに両手で持ち直した」

3 読み物資料の素材について

【参考URL等】

- ・ 小野市HP <http://www.city.ono.hyogo.jp/p/1/4/4/4/>
- ・ 伝統工芸 青山スクエアHP <http://kougeihin.jp/item/1004/>

【訪れたい場所】

- ・ 小野市伝統産業会館 〒675-1380 兵庫県小野市王子町 806-1 TEL：0794-62-3121
- 宮本 一廣（みやもと かずひろ）さんについて
 - ・ 播州そろばん（杵造組立部門）伝統工芸士で小野市に在住。昭和31年より現在の仕事に従事し、昭和51年、播州そろばんが通産大臣（現経産大臣）指定伝統的工芸品となり、同年、宮本さんも伝統工芸士の認定を受けた。平成20年瑞宝単光章を受章のほか、数々の賞を受賞する。
- 伝統工芸士とは
 - ・ （財）伝統的工芸品産業振興協会が行う試験に合格した者が、「伝統工芸士」の称号を有する。受験資格として、経済産業大臣指定伝統的工芸品の製造に現在も直接従事し、12年以上の実務経験年数を有し、原則として産地内に居住していることが条件となっている。
- 伝統工芸品とは
 - ・ 消費者が伝統的工芸品を安心して購入できるよう、経済産業大臣が指定した技術・技法、原材料で製作され、産地検査に合格した製品。伝統工芸品には、「伝統マーク」をデザインした「伝統証紙」が貼られる。
- そろばん作りについて（宮本さんは④～⑧をほとんど手作業で行っている）
 - ①軸 作 り：竹を寸法切りにし、小さく割って丸いひごに加工、磨いて仕上げる。
 - ②杵 材 作 り：主に黒檀などの固い木の原木を細かく切って、各部分に合わせた板に加工。
 - ③玉 作 り：原木を輪切りにし、丸い形に打ち抜き、さらに削って玉の形を作る。
 - ④杵 加 工：杵の板に穴をあけ、みぞを作って組み立てができるようにする。
 - ⑤中棧(さん)組み：中棧に軸（ひご）を差し込む。
 - ⑥玉 入 れ：軸に玉をとおす。
（玉のたくさん入った箱の中で、軸を差した杵を左右にゆするだけで、見事玉が軸に入る）
 - ⑦組 立 て：左右杵、裏板、裏棒などを入れて組み立てていく。
 - ⑧磨 き：固定がすめば、紙ヤスリやムクの葉で磨き艶だしをすれば完成。
- 宮本さんの言葉（インタビューから）
 - ・ 「そろばんは玉の動きが命。いかに軽く動いてぴしっと止まるか。これが難しい。玉とひごのすべり具合も職人の勘で全てが決まる。」
 - ・ 「10人いたら10人ともにとって使いやすいそろばんを作りたいが、それは不可能や。でも、1人でも多くの人に使いやすいと思ってもらえるそろばんを作りたい。だから毎日、精進せなあかん。手抜きは一切しない。もし体調が悪ければ作らない。」

4 展開の具体例

そろばんづくり —小野のそろばん—

- ・ **主 題 名** ・働くことの意味 C (13)
- ・ **資料の概要** ・おもちゃにして遊んでいるうちにそろばんの調子を悪くしてしまった かず は、そろばんは簡単に機械で作れるものだったまま、伝統工芸師の宮本さんの工場へお母さんに連れて行かれる。そこで、かず は宮本さんの職人技のすごさ、そろばんに込められた宮本さんの「心」を知り、働くことの意味の重さやすばらしさを感じる。
- ・ **ね ら い** ・宮本さんとお母さんの話を聞いて道徳的に変化する主人公を通して、働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働こうとする道徳的心情を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・ 本資料に興味を持つ。	そろばんで遊んでしまったことはありませんか。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・ 母にしかられた時の主人公の気持ちを考える。 ・ 母がそろばんを差し出した時、うつむいたまま顔をあげられないでいたかず の気持ちを考える。 ・ そろばんをすぐに両手で持ち直した主人公の気持ちを考える。 	<p>お母さんにしかられて、そろばんをゴロゴロ動かしている手を止めた時、かずはどう思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ びっくりした。そんな大きな声でしからなくてもいいのに。 ・ 何でそんなに怒っているんだろう。 ・ そろばんをゴロゴロしていただけなのに。 <p>うつむいたまま顔をあげられないでいた かず は、どんなことを思っていたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 毎日工夫しながら50年以上もそろばんを作っているのに、失礼なことを言っちゃったな。 ・ 指先の感覚で0.1ミリのちがいがわかるなんて、そろばん作りはすごい技術が必要な仕事だったんだ。 ・ ここまで使う人のことを考え、気持ちをこめて作っているんだ。知らなかった。 <p>そろばんをすぐに両手で持ち直した かず は、どんな気持ちだったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ このそろばんには、宮本さんの使う人を思う気持ちがぎゅっしりつまっていて重みがあるな。 ・ このそろばんには、50年間の仕事の努力や工夫がぎゅっしりつまっていてずっしり感じるな。
終 末	・ 感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

主人公は、軽い気持ちでそろばんを転がして遊んでいたことをおさえる。

そろばん作りの高い技術や職人の思いに関する宮本さんの話を聞いて、主人公が働くことの意味の重さを意識し始めていることをおさえる。

宮本さんの話とお母さんの話がきっかけとなり、働くことの意味の重さや大切さをさらに強く感じている主人公の心情の高まりをおさえる。

【p 60～ p 63】 風の学校 —中田正一—

1 資料活用にあたって

- 中田さんの海外での技術指導を支えた「我が国に課せられている役割と責任を自覚し、世界の人々から信頼と尊敬を得られるように努めよう」という気持ちに焦点をあてれば内容項目はC（17）となり、その根底にある、人に対する思いやりに焦点をあてれば内容項目はB（6）となる。
- 先人の場合、努力を続けることは誰しもあることで、その努力のみ書いてある資料は、内容項目はA（5）で扱い、努力を続けることになった大きな夢が描かれている場合は、その夢で内容項目を定めるとよい。

2 資料の読み方のポイント

- ※ 展開の具体例は内容項目をC（17）で想定したものを示している。
- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（中田さん）の生き方を貫くものを考える資料であり、中田さんの立場で場面を捉えていく。（子どもが「中田さん」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 中田さんの生き方を貫いたものは、思いやりをもって、世界の人々から信頼と尊敬を得られるように努めようという気持ちであった。
- 資料冒頭の「西アフリカを走る列車の中で回想する場面」は、資料末の「西アフリカを走る列車の中で決意を新たにしている場面」につながるが、最後に八十才の時の出来事であることが「種明かし」されている。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「風人たちの夏 ある国際協力の記録」、瀧井 博臣、八月書簡、1992年
- ・ J Aの子ども雑誌『ちゃぐりん』シリーズ：光をともした人びと⑧
井戸ほりで国際協力 中田正一 北川幸比古、社団法人 家の光協会、2007年11月号
- ・ 朝日新聞「彼らの流儀」 風の学校I、沢木 耕太郎、朝日新聞社
1990年8月12日、19日
- ・ 神戸新聞 我が心の自叙伝「中田正一」①～⑳、中田正一、神戸新聞社、
1990年6月27日～11月7日 毎週水曜日掲載
- 中田正一について
 - ・ 1906（明治39）年淡路島に生まれる。大学を卒業後、農林省に入り農業改良普及事業にかかわる。57歳の時国際協力事業団専門家としてアフガニスタンに農業技術の指導に行ったのが、海外の農業とのかかわりの始まりであった。農林省を退職後、農業協力プロジェクトチームのリーダーとしてバングラデシュに赴任。その時、貧しくて食べ物が不足している国には、お金や食料、進んだ農業機械を持ち込んでもそのときだけの援助となってしまう。それを続けると、頼りにしてしまってもその国が自立できなくなる。人が出かけていって、その国にあった技術をいっしょに工夫するのでなければ、ほんとうの援助ではないと考えるようになった。
 - ・ 1982年（昭和57）年バングラデシュから帰ると、日本政府がまだ手をつけていなかった海外協力の人材養成の「風の学校」を設立し、生涯を国際協力に捧げた。
- 「風の学校」について
 - ・ 海外協力活動を目指す日本の青年達に農業の各分野にわたる技術、技能や井戸掘り技術などについて実際に体験して経験を積ませる学校。適正技術とって発展途上国の物資のない状況でもすぐに活用できる技術に重きを置いた。千葉県の上総掘りという昔ながらの手掘りの井戸掘り技術を研究し、海外の水不足で困っている地域で住民と共に何十本もの井戸を掘ってきている。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ 世界の人々のために C (17)
- ・ **資料の概要** ・ 海外で農業技術の普及に携わり、水の確保の大切さを思い知った中田は、帰国後、日本で古くから伝わる技術を研究するとともに、農業技術で現地の人々に貢献できる人材育成をめざし「風の学校」を創設した。学んだ者が旅立つのを頼もしそうに見送る中田であったが、彼自身80歳を過ぎても国際協力への熱い思いを持ち続けた。
- ・ **ね ら い** ・ 西アフリカを走る列車の中で「まだまだ」と思う80歳の中田さんの熱い思いを通して、わが国に課せられている責任と役割を自覚し、世界の人々から信頼と尊敬を得られるように努める道徳的心情を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・ 今日資料に興味を持つ。	副読本P63の写真(現地の人々に指導する中田さんの写真)を見ましょう。
展 開	・ 資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・ 井戸の掘り方など日本の古い技術を研究していた主人公の気持ちを考える。	アフガニスタンから戻り、井戸の掘り方など日本の古い技術を研究する中田さんは、どんなことを考えていたでしょう。 ・ 作物が枯れて困っている国の人たちを助けてあげたい。 ・ 日本の優れた技術が世界中の困っている人たちの役に立てばいいのだが。
	・ 井戸が完成し、現地の人と両手で握手する主人公の気持ちを考える。	井戸が完成し、いっしょに働いた現地の人と両手で握手する中田さんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・ 井戸が完成して、現地の人たちの役に立てたぞ。 ・ 現地の人たちと一緒に喜びあえてうれしい。
	・ 「風の学校」で学んだ人たちを見送る主人公の気持ちを考える。	「風の学校」で学んだ人たちの頼もしくなった背中を見送りながら、中田さんはどんなことを思っていたのでしょうか。 ・ 現地の人たちに信頼されるような仕事をして来いよ。 ・ 現地の人たちへの思いやりを大切にすんだぞ。
	・ 西アフリカを走る列車の中の主人公の気持ちを考える。	「まだまだ、わたしにはやらなければならないことがたくさんある。」と言いながら中田さんはどんなことを考えていたのでしょうか。 ・ 農業技術を求めている人たちのために力をつくそう。 ・ 世界の人々から信頼されるようがんばろう。
終 末	・ 感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

現地で水の確保の大切さを痛感し、世界の人々のために役立ちたいという意識が主人公に起こっていることをおさえる。

世界の人々のために役立ち、信頼されることの大切さを実感している主人公の心に共感させる。

世界に旅立つ人々を頼もしく感じながら、自分の思いを託している主人公の心を考えさせる。

「世界の人々から信頼され、日本に課せられている責任と役割を果たしたい」という心情が、80歳の主人公を支え続けていることをおさえる。

【p70～p75】 いつか必ず役に立つ 一大上宇市—

1 資料活用にあたって

- 長文のため、事前に読ませておく。
- 70ページ～72ページ9行目までは、宇市が信念をもって研究に没頭している様子について教師が要点を説明し、72ページ10行目から発問構成する進め方もある。
- 努力に焦点をあてれば内容項目はA(5)であるが、本資料は大上宇市が抱いていた大きな夢に焦点をあてて内容項目はC(16)で扱う。
- 先人の場合、努力を続けることは誰しもあることで、その努力のみ書いてある資料は、内容項目はA(5)で扱い、努力を続けることになった大きな夢が描かれている場合は、その夢で内容項目を定めるとよい。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公(宇市)の生き方を貫くものを考える資料であり、宇市の立場で場面を捉えていく。(子どもが「宇市」になって考えられるように発問を工夫する。)
- 宇市の生き方を貫いたものは、「自分の研究を村の役に立てたい」という郷土愛の心であった。
- 主人公は変化しないが、宇市の立場で場面を捉えていく。(子どもが「宇市」になって考えられるように発問を工夫する。)

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『新宮町合併45周年記念出版 まんが 大上宇市』
新宮町教育委員会 大阪書籍株式会社 1996年
- ・ 『郷土の偉大な博物学者 大上宇市』
新宮町教育委員会 株式会社共和印刷 1992年
- 大上宇市について
 - ・ 「コヤスノキ」の発見者として知られている。
 - ・ 1865年、現在のたつの市新宮町の貧しい農家に生まれる。体が弱かったため、薬草を求めて山野を散策したことが動植物学へ進む発端となった。
 - ・ 薬草を求めて歩いている内に、植物、動物、貝類と興味はどんどん広がっていき、中国、近畿地方は歩いていないところは無いと言われるほど採集と観察を続けた。「自分の研究は必ず役に立つ」という強い信念で、採集や観察したことは全て図説で丁寧に書き残した。
 - ・ 宇市の研究成果は、学歴を重視する学会では「いなか者の考え」として認めてもらえなかった。しかし、1900年(明治33年)、宇市が33歳の時に牧野富太郎によって「コヤスノキ」が世界の植物学会に発表されたことによって、宇市の名が脚光を浴びようになると、今まで発表された数々の報告が再評価・再確認され、植物、昆虫の業績だけでなく、貝類学会でも認められるようになった。
 - ・ 30年あまりも続けた村の気象観測や土壌研究の結果を生かし、米ではなく桑を植えて養蚕をすることをすすめ、村は、揖保郡一の繭の生産地となり生活を潤した。
- 「コヤスノキ」について
 - ・ 「コヤスノキ」は、西播磨と岡山県東部にしか生えていない珍しい植物である。
「幻の木」といわれていたこの植物は、大上宇市によって発見され、1900年(明治33年)、牧野富太郎によって世界の植物学会に発表された。
 - ・ 1927年(昭和2年)龍野市天王山のコヤスノキを兵庫県天然記念物に指定するための調査があったが、薪として刈り取られ若木しか残っていなかったため、相生市矢野町のコヤスノキが兵庫県の天然記念物に指定された。

4 展開の具体例

いつか必ず役に立つ 一大上宇市

- ・ **主題名** ・ふるさとのために C (16)
- ・ **資料の概要** ・宇市は、「自分の研究は必ず役に立つ」という信念を持って独学で研究を進める。学会でも認められるようになった自身の研究を生かし村のために懸命に働くが、日照りのために村の生活は楽にならない。あきらめかけた宇市であったが、「自分の研究は必ず役に立つ」という信念に奮起して、村の自然を生かした養蚕の導入を指導し、やがて村は活気づく。
- ・ **ねらい** ・「自分の研究はいつか必ず役に立つ」という信念から、村の土地にあつくわを育てかいこを育てる産業を生み出した宇一を通して、郷土を大切にす道徳的心情を育てる。

展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P73の写真(宇市が書き記したノートの一部)の写真をみましょう。	<p>p72の9行目までで、「自分の研究はいつか必ず役に立つ」という信念を支えとして、主人公が研究に没頭していることをつかませる。</p> <p>学者として有名になることよりも村の役に立つことを願う、主人公の郷土を愛する心情をおさえる。</p> <p>村の現実を目の当たりにして無力感を感じている主人公の心を考えさせる。</p> <p>思い起こした「自分を支えた信念」がきっかけとなり、郷土のために力を尽くす気持ちが主人公に再び高まったことをおさえる。</p> <p>自分の研究が村の役に立ち、安堵している主人公の郷土を愛する心情をおさえる。</p>
展開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。		
	・コヤノスギの発見で研究が認められた時の主人公の気持ちを考える。	研究が多くの人たちの間で認められるようになった時、宇市はどんなことを思ったのでしょうか。 ・自分の研究を村のために役立てたい。 ・村のためにこれからも研究を続けていこう。	
	・村の生活が一向に楽にならない時の主人公の気持ちを考える。	夏の日照りが続き、村の生活がいつこうに楽にならない時、宇市はどんな気持ちだったのでしょうか。 ・どうすればいいんだ。 ・私にはこの村を助けることなどできない。	
展開	・若い頃の気持ちを思い出した宇市の気持ちを考える。	「いつか必ず役に立つ」という気持ちを思い出した宇市は、どんな事を考えたのでしょうか。 ・村の役に立つためにもう一度頑張ってみよう。 ・自分の研究は、必ずみんなの役に立つことを信じよう。	
	・活気づく村に目を細めた宇市の気持ちを考える。	活気づく村に目を細めていた宇市は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・自分の研究が役に立ち、村が活気づいてよかった。 ・家族も村の役に立つ私の研究を理解してくれるだろう。 ・これからもこの村を大切にしていこう。	
終末	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。	

【p78～p81】 ぼくの町のたからもの ー平之荘能舞台ー

1 資料活用にあたって

- 社会科の地域の人々が受けついできた文化財や年中行事の学習などに関連させると効果的である。
- 狂言について、簡単に説明しておくとうい。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：(転校生の) ぼく (子どもが「ぼく」になって考えられるように発問を工夫する。)
- 変化するきっかけ (助言) は：6年生の演じる狂言と観客 (地域の人々) がつくる空間
- 変化するところは：「ぼくは寒さを忘れ、いつのまにかこの不思議な空間の一員になっていた。」

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 加古川市立平荘小学校HP
<http://www.city.kakogawa.lg.jp/gakoen/ryosocyugakkoku/heisosyogakko/index.html>
- 平之荘神社について
 - ・ 加古川市平荘町にある「平之荘神社」は創建が鎌倉時代とされている歴史の古い神社であり、毎年10月に行われる秋祭りには獅子舞と2基の屋台が奉納され、境内は大変賑わう。境内には、1688年建立とされている能舞台がある。
- 狂言発表会について
 - ・ 10年ほど前から平荘小学校の6年生が平之荘神社の能舞台で狂言発表会を行っている。狂言発表会には1年生から5年生までの全校生、保護者、そして地域の人々が多数参加する。
 - ・ 狂言発表会に向けて、6年生は自分達でポスターを作成し、各町内会や店舗や事業所等に配布している。また毎年、新聞社やテレビ局などの取材もあり、地域外からのお客様も多く観客は年々増えている。
 - ・ 狂言の演目は有名な「附子」「柿山伏」をはじめ「菌」や「口真似」などである。低学年にはわかりにくい表現もあるが、笑いを誘う所作や台詞に引き込まれ、見ている者がついつい笑ってしまう場面も多くある。
 - ・ 狂言の指導は第1回より、大蔵流狂言師山口耕道先生の指導を受けている。1月の中旬から2月下旬の狂言発表会まで、週1回の稽古、そして各担任と毎日の稽古を行っている。大きな声を出したり、人前に立ったりすることが苦手な児童もいるが、何度も練習を積み重ねることによって次第に役になりきった演技に近づいていく。
 - ・ 衣装は浴衣と剣道用袴、そして手作りの袴。袴作りは2学期の後半から図工の授業で行っている。
 - ・ 6年生は1年生の時から狂言を観ており、発達段階に合わせて狂言を理解している。高学年になると、どの演目のどの場面を演じたいと思う児童も多く、「6年生になったら狂言をやるんだ。」という心構えはできている。

4 展開の具体例

ぼくの町のたからもの ―平之荘能舞台―

- ・ **主 題 名** ・わたしたちのまちの宝物 C (16)
- ・ **資料の概要** ・雪が降る寒い日に、ふるえながら神社の境内で狂言発表会を見学する転校生のぼくは、狂言に興味はないし、寒いのではやく帰りたいと思う。しかし、狂言が始まると、真剣な舞台と、演じている6年生と観ている地域の人々との一体感に引き込まれたぼくは、自分も早く6年生になって演じたいと思うようになる。
- ・ **ね ら い** ・6年生の演じる狂言を見て、寒さを忘れいつのまにか不思議な空間の一員になり道徳的に変化する主人公を通して、地域の伝統文化に積極的にかかわろうとする道徳的実践意欲を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導 入	・今日の資料に興味を持つ	副読本P80の写真(狂言の舞台)の写真を見ましょう。	寒い中を待ち、能舞台や狂言発表会の話に興味をもてない主人公は、地域の伝統に親しもうという意識が低いことをおさえる。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・宮司さんの話を聞いている主人公の気持ちを考える。	開始前の宮司さんの話を聞いているぼくは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・狂言は古くから伝わっているようだけれど、興味がないよ。 ・こんなに寒くちや楽しめないよ。 ・早く終わってくれよ。 ・どうして誰も文句を言わないのかな。	地域の伝統を受け継ぐことを誇りに思っ てあいさつをする6年生と真剣に聞くみんなに囲まれて、取り残されたように感じる主人公の心を考えさせる。
	・開演時の6年生のあいさつを聞いている主人公の気持ちを考える。	狂言が始まる前の6年生のあいさつを聞いているぼくは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・6年生は真剣だな。 ・見ている地域の人たちも真剣だな。 ・ぼくだけが取り残されているみたいだ。	演じる側と見ている地域の人々が一つになったような不思議な空間がきっかけとなり、郷土の伝統文化を大切にすることのすばらしさを主人公が感じていることをおさえる。
	・終演時の6年生のあいさつを聞いている主人公の気持ちを考える。	ぼくは、どうして寒さをわすれたのでしょうか。 ・舞台のすばらしさや熱気を感じたから。 ・みんなと一体感を感じたから。 ・胸をはって堂々と舞台に立つ6年生がかっこよかったから。	
	・みんなと一緒にうなずいた時の主人公の気持ちを考える。	「はやく6年生になりたいね」と誰かが言った時、みんなと一緒にうなずいたぼくは、どんなことを思っていたのでしょうか。 ・ぼくも6年生になったら狂言をがんばりたい。 ・たくさんの地域の人々に観てほしい。 ・ぼくもこの地域の一人としてがんばるぞ。	主人公の「郷土の伝統文化を大切にしよう」という心情の高まりをおさえる。
終 末	・感じたことを発表する。	感じたことを発表しましょう。	

【p 88～p 93】ここは山田錦のふるさと ―藤川禎次―

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 88ページ～89ページまでは、由紀が酒米に興味をもつ様子について教師が要点を説明し、90ページから発問構成する進め方もある。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：由紀（子どもが「由紀」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：おじいちゃんから聞く藤川禎次さんの話
- 変化するところは：「夕日に照らされてあかね色に輝いている山田錦が、藤川さんの思いを語りかけているようで、じっとまどの外を見つめていました。」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「郷土百人の先覚者」、編集 兵庫県教育委員会、発行 (財)兵庫県社会文化協会、1967年
- ・ 「人と風土が育てた日本一の酒米『山田錦物語』」、編集 兵庫県酒米研究グループ、発行 神戸新聞総合出版センター、2010年
- ・ 「藤川禎次―その生涯と背景―」、藤川永生、2004
※非売品。加東市滝野図書館に5冊の蔵書あり（貸出可）

【訪れたい場所】

- ・ 「山田錦の館」
三木市吉川町吉安 222 TEL：0794-76-2401

○ 山田錦と藤川禎次について

- ・ この資料でとりあげている酒米の山田錦は、誕生から70年以上経た現在でも、国内で生産される酒米の中で、生産量トップを維持し続けている品種である。
- ・ 山田錦の誕生に大きな貢献をしたのが、藤川禎次氏である。氏は、1967年、兵庫県政百年事業により「郷土百人の先覚者」の一人に選定され、兵庫県教育委員会が編集し、(財)兵庫県社会文化協会が同年に発行した「郷土百人の先覚者」という本に、酒米の王者「山田錦」普及の功労者として紹介されている。
- ・ 藤川禎次氏を父にもつ藤川永生氏が執筆・発行した「藤川禎次―その生涯と背景―」のあとがきには、「藤川禎次は没してすでに五十余年になるが、そのライフワークであった酒米山田錦の普及・育成についても生存中は報われることが少なかったようである。また、幼時に肉親と死別したことに始まり、晩年も太平洋戦争によってわが国が壊滅的な被害を受けるという未曾有の難局と逆風にさらされるなど、その生涯はけっして順当とはいえなかった。―中略―人の人生はその人の志、境遇、時代、歴史が深くかかわっており、まさに百人百様である。生きてゆく限り、ふりかかる逆境や試練を避けて通ることはできない。それを乗り越えてゆく生き様が多く、多くの教訓と強い感動をもたらす。雑学の一助になれば幸いである。」と記されている。

4 展開の具体例

ここは山田錦のふるさと —藤川禎次—

- ・ **主 題 名** ・ふるさとのために C (16)
- ・ **資料の概要** ・社会科の学習で、山田錦について調べた由紀は、その開発に力を注いだ藤川禎次の存在を知り、祖父に詳しく話を聞かせてもらう。地域の農家の人たちのために品種開発の研究にねばり強く取り組んだ藤川さんの思いを知った由紀は、山田錦とともに藤川さんを「地域の自慢」と感じるようになる。
- ・ **ね ら い** ・おじいちゃんの話聞いて、夕日に照らされてあかね色にかがやいている山田錦が、藤川さんの思いを語りかけているように感じる主人公を通して、地域の人々や生活を大切にし郷土を愛する道徳的心情を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P89の写真（酒米を育てている田）の写真を見ましょう。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・藤川さんの存在を知った時の由紀の気持ちを考える。 ・祖父から藤川さんの話を聞いた後、じっと窓の外を見つめる由紀の気持ちを考える。 ・大きくなずいた由紀の気持ちを考える。 	<p>酒米の生みの親が自分たちの地域の藤川禎次という人だと知った由紀は、どんなことを思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの地域にそんな人がいたんだな。 ・藤川さんはどんな人だったのかな。 ・藤川さんはどんな気持で酒米を開発したのかな。 <p>じっと窓の外を見つめながら、由紀はどんなことを考えていたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの町にもすごい人がいたんだな。 ・藤川さんの努力を支えたのは、地域を大切にする気持ちだったんだな。 <p>大きくなずきながら、由紀は続きをどのように書こうと思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜなら、地域の人たちのことを考え、努力した人だからです。 ・地域の自慢は、「もの」だけではありません。地域の人のため頑張ってくれた「人」も自慢です。
終 末	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

自分たちの地域に日本を代表する酒米を開発した人がいたことを知った主人公が、藤川さんに興味を持ち始めていることをおさえる。

地域を愛する藤川さんの思いについてのおじいちゃんの話がきっかけとなり、郷土を愛する意識が主人公に起こっていることをおさえる。

由紀が書こうとした内容を想像することにより、ノートを前にして大きくなずいた主人公の心を考えさせ、郷土を愛する主人公の心情の高まりをおさえる。

【p 96～ p 101】 わたしの雪彦山

1 資料活用にあたって

- 「雪彦山」が兵庫県のどのあたりにある山かについて、地図で示してから資料に入るとよい。
- 山の説明に深入りしないようにする。
- イラストを拡大して、場面絵として使う方法もある。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：あい子（子どもが「あい子」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：おじいちゃんの話（おじいちゃんが子どものころの自然豊かな雪彦山の話）
- 変化するところは：「わたしが大きくなっても、花も木もとりの動物もたくさんいる今のままの山にしたいな。」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「永遠なる我がふるさと 守り伝えるべき、夢前の文化と誇り』夢前町閉町記念誌、2006年
- ・ 「夢前の自然」、夢前町教育委員会・夢前の自然調査研究委員会 編、2000年

【訪れたい場所】

- ・ 雪彦山
JR姫路駅から神姫バス51系統「山之内」行き乗車。終点山之内で下車約3.5km。

○ 雪彦山について

- ・ 雪彦山は、姫路市の北西夢前町にあり、弥彦山（新潟県）英彦山（福岡県）と共に「日本三彦山」として知られる修験道の地である。日本百景、ひょうごの森百選、兵庫50山、近畿100名山に選定されており、四季を通じて多くの登山者が訪れている。
- ・ 雪彦山には、オチフジ・アケボノツツジ・ミツマタなど珍しい植物が自生しており、登山者を楽しませている。また、鹿や狐、猿など多くの動物や鳥、昆虫が多く生息している自然豊かな山である。
- ・ 雪彦山は神の山として、地域の人々から崇められていた。山はかつて子どもたちにとっては、遊び場であり、大人にとっては、薪や落ち葉などの燃料や山の幸の供給源であった。しかし、電気やガス、灯油などが薪にとって代わり、生活スタイルが変わることにより、人々と山の関わりは薄れてしまっている。また、植林や地球温暖化、登山者が山野草を根こそぎ採ったり、ごみをしたりするなどのマナーの悪さから、自然破壊が進み、山崩れや、獣が田畑を荒らすなどさまざまな問題が出てきている。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ 自然をたいせつに D (19)
- ・ **資料の概要** ・ あい子は祖父と雪彦山に登り、岩でごつごつした山と思っていたが美しい花が咲く山であることを知る。かわいい花に手をのぼした時、祖父に注意されたあい子とはまどう。祖父の話聞き、自然を守ることの大切さに気づいたあい子は、「自分たちがこの自然を守る担い手になろう」という思いをもって、祖父と一緒に山頂を見上げる。
- ・ **ね ら い** ・ おじいちゃんから雪彦山の自然の話聞いて、(私が大きくなっても花も木も鳥も動物もたくさんいる今のままの山にしたいと) 道徳的に変化する主人公を通して、自然のすばらしさに感動し、自然や動植物を大切にす道徳的実践意欲を育てる。

・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P97の写真(秋の雪彦山)の写真をみましょう。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・花に手をのぼしたことを注意され、小さな声で謝っている主人公の気持ちを考える。	「ごめんなさい。」と謝りながら、あい子はどんなことを思ったのでしょうか。 ・知らなかったの。ごめんなさい。 ・かわいい花をおかあさんに見せたいだけなのに。 ・おじいちゃん、さみしそうだな。どうしてかな。
	・大きくなっても今のままの山にしたいと言う主人公の気持ちを考える。	「わたしが大きくなっても、花も木も鳥も動物もたくさんいる今のままの山にしたいな。」と言いながら、あい子はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・いつまでも自然いっぱいの雪彦山だったらいいな。 ・自然いっぱいの雪彦山を守っていこう。
	・おじいちゃんと雪彦山のとっぺんをながめている主人公の気持ちを考える。	おじいちゃんといっしょに山のとっぺんを見上げながら、あい子はどんなことを考えているのでしょうか。 ・私たちが自然を守らないといけないんだね。 ・おじいちゃん、さっきお花をとろうとして、ごめんね。
終 末	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

主人公は悪気なく、ただお母さんに見せようとして花に手をのぼしたことをつかませる。

昔の雪彦山に関するおじいちゃんの話がきっかけとなり、自然が豊かな雪彦山の様子を思い浮かべた主人公が、自然や動植物を大切にす意識を持ち始めていることをおさえる。

自然や動植物を大切にす意識が高まり、主人公が「私たちが雪彦山の美しい自然を守ろう」という実践意欲を強めていることをおさえる。

「メッセージ」の活用について

この副読本に掲載している「メッセージ」は、他の読み物資料のように道徳科で中心資料として扱うことも可能であるが、その他の学校における教育活動での活用や、家庭において親子で話しあう機会とするなど、各校において工夫した多様な活用が考えられる。

1 「メッセージ」の趣旨

この副読本は、郷土に誇りを持ち、人と人とのつながりや社会の中での自己の責任や義務、役割を自覚するなど、自己の生き方のよりどころとなるような子どもの心に響く魅力あるものとなるように願って作成している。

そこで、兵庫にゆかりのある方々が、これまでの人生において心を動かされたあるいは揺さぶられた体験、生き方の支えになっている体験等をもとに、地域の先輩として、人生の先輩として、兵庫の子どもたちに伝えたいことや願いを以下 2 で示す大切にしたい内容を踏まえたメッセージとして掲載している。

2 「メッセージ」で大切にしたい内容

大切にしたい項目	内 容（小学校）
自他の生命を尊重する心	生命の大切さに関するものであり、生命あるすべてをかけがえないものとして尊重し、大切に育てる児童を育てる。
ルール・公德心（規範意識）	児童が生活する上で必要とされる社会規範を守るとともに、公德心を持ち、それらの精神を日々の生活の中に生かしていく児童を育てる。
礼儀	他の人とのかかわりにおける習慣の形成に関するものであり、状況をわきまえて心のこもった適切な礼儀正しい行為ができる児童を育てる。
自由と責任	自由を大切にするとともに、それに伴う自律性や責任を大切に育てる児童を育てる。
勤労	仕事に対して誇りや喜びを持ち、働くことの意義を自覚し、進んで社会に役立とうとする心をもった児童を育てる。
他人を思いやる心	他の人に接するときの基本的姿勢に関するものであり、相手に対する思いやりや親切な心を持ち実践のできる児童を育てる。
郷土を愛する心	郷土とのかかわりに関するものであり、郷土の伝統と文化を大切に、郷土を愛する心をもった児童を育てる。
国際理解	国際理解と親善の心をもった児童を育てる。
家族を愛する心	家族集団とのかかわりに関するものであり、家族や家庭を愛する心をもった児童を育てる。

3 多様な場面での子どもの活用とそれを促す工夫

(1) 学校や家庭の日常生活の中で子どもが活用する

子どもが学校や家庭の日常生活の中で活用する。例えば、学校においては朝の会・帰りの会や読書タイムなどで、また、休み時間や放課後などの自由な時間での活用が考えられる。さらに、家庭においても、子どもが自由に活用したり、家族と話題にしたりすることが期待される。そのために、例えば、日にちを決めて持ち帰る時間を設定したり、長期休業中の活用を促したりするなど、家族と話題にしたり、保護者がメッセージを活用し、子どもに助言したりすることなどが考えられる。

(2) 道徳科で活用する

道徳科の教材として「メッセージ」を活用することもできる。ただ、道徳科においては補助的な資料として用いることが多いと考えられるが、指導計画に位置づけて生かすことも考えられる。

道徳科においては、例えば、次のような場面で活用することが考えられる。

- ①展開段階の中心的な資料として、ある内容項目に関する学習に生かし、内容を深める。
- ②終末段階の題材として、学習したことの明確化を図るために用いる。
- ③導入段階の題材として、道徳的価値に関心を持たせる。

(3) 総合的な学習の時間の動機付けや自己の生き方を考える際などに活用する

総合的な学習の時間においても活用することができる。子どもが興味・関心を大切にし、自ら課題を見つけ、探究的な見方・考え方を働かせ、自己の生き方についての考えを深める体験的、問題解決的な学習を行う際、「メッセージ」を課題を見つけるヒントにしたり、体験的な学習への動機付けとしたりして役立てることができる。

(4) 特別活動の各内容と関連させて活用する

特別活動の、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事においても活用することができる。小学校においては、例えば、学級活動(3)、とりわけ「現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成」や「社会参画意識の醸成や働くことへの意義の理解」にかかわる指導などで生かすことができる。また、学級活動(1)においても、協力して楽しい学級や学校の生活づくりに参画する自主的な取組などの中で活用することができる。さらに、学校行事においては、例えば、様々な活動の事前指導や事後に体験したことを振り返り、まとめたり、発表し合ったりする活動、動機付けを図る際の題材などとして生かすこともできる。

なお、学級活動(1)などの子どもの自発的、自治的な実践が中心となる活動においては、教師が助言等で補助的に用いるなどして、子どもの自主的、実践的な態度がはぐくまれるよう配慮することが大切である。

(5) 家庭や地域との連携

「メッセージ」は、大人が読んでも心に響き、生き方を考えることのできる内容である。学校で、家庭で、また地域社会などで子どもと一緒に話し合い、子ども理解を深める題材とすることができる。各校においては、学年通信や保護者会などで紹介し、学校と家庭が連携した道徳教育の推進に活用できる。例えば、教師、保護者、地域の人々による懇談会などで道徳教育について話題にすると、「メッセージ」の内容を提示することによって、道徳教育への共通理解を深めることができる。また、道徳科の公開授業での活用、各種通信や地域掲示板などでの活用等によって、連携を具体化させることができる。